たくみ
CraftSmanship
第50号

特集　民藝運動の巨匠展
－ B・リーチと芹沢銈介を中心に －

火鉢と鉄瓶の温かさ

三月十一日の東日本大震災から二カ月半ばかりたった。この筆舌に尽くしがたい大災害は、福島第一原発の破壊という副産物を生み、被災した多くの人々に故郷を失わせるという最悪の事態を招いた。

六十六年前、広島、長崎に原爆の被爆を受け、核放射線の怖さを身をもって知ったはずの日本人が、経済効率と地域開発の幻想に惑わされて大きな過ちを犯してしまった。今回の災害は天災ではない、むしろ人災の部分が多いのではないか、と人々は直観している。

地震から間もなく、停電が頻繁にあって、そのころはまだ朝夕はかなり寒かったから、わが家では大火鉢を持ち出して久しぶりに炭火を入れた。はじめの三十分ほどは一酸化炭素の匂いが気になったが、やがて鉄瓶のお湯も沸いて部屋に暖気がゆきわたり、とくに足元の温かさに、家族みなが暗い中ほっと顔を見合わせたのであった。

灯りは洋ローソクが売り切れで、前に買い置いてあった石川県七尾の和蝋燭を点けた。仏壇用には少し大きく、永いこと使わないでいたがリビングや台所の灯りとしては、全部で三つも点ければ充分であった。しかも四時間後に電気が点いたとき、四・五寸（十三・五センチ）の蝋燭はまだ四割ほどが残っていた。

今回の災害からはさまざまなことを考えさせられる。拙宅でも使うこともあまりなかった炭、五徳、火箸、十能、蝋燭、燭台、懐中電灯、湯たんぽ、鉄瓶、土鍋が三月から四月にかけてどれほど役に立ったことか。家人はこの夏の暑さ対策はまず「うちわ」だという。しかし今年は真夏日には、蚊取り線香を焚いて窓を開けて寝るとしよう。

原発も、先端技術も、高速道路も、システム化された流通管理も、あまりにあっけなかったと思わされたこの二カ月あまりであった。

（志賀直邦）

バーナード・リーチの エッチングと初期楽焼の作品

イギリスの陶芸家B・リーチは一八八七（明治二十）年、香港で生まれた。父アンドリュウ・J・リーチは弁護士。幼時京都や彦根で、日本にいた祖母のもとで養育された。

一九〇七年、ロンドン美術学校でエッチングを学び、また留学中の高村光太郎を知る。そのころラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の日本に関する著作を読んで日本にあこがれ、一九〇九年、来日する。その年秋、リーチは上野桜木町の新居でエッチングの公開教授をはじめ、白樺派の武者小路実篤、志賀直哉、柳宗悦らが参加する。

ロンドンの美術学校時代、リーチは自ら「自分の作品の中で、最良のエッチングの一つ」と述べている『ゴシックの精神』を制作する。彼の自伝的記述（一九三三年）によればこの作品が展覧会に出品されたのは、日本に来てからで、一九一一（明治四四）年、赤坂で開かれた「白樺主催洋画展覧会」が最初であった。これは一九〇八年の年記のある作で柳宗悦が求めた。もう一点はウェールズの国立美術館所蔵の作、更にリーチの伯父（カーチフ国立美術館長だった人）が一九二四年にリーチから求めている。

エッチング「ゴシックの精神」
バーナード・リーチ作

実はこのほかにもう一点ある。それが今回のたくみギャラリー出品の『ゴシックの精神』である。この作もまた、リーチが一九〇九年に来日した際にエッチングの印刷機と共にイギリスから持参したものと推測できる。

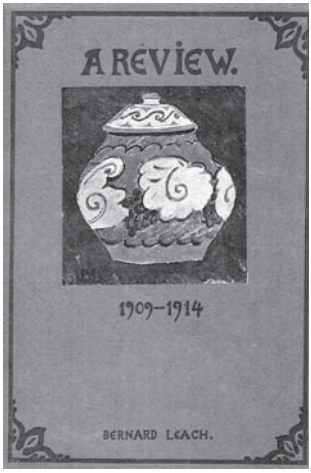
この作品のモチーフはロンドンのチエルシーにあるカトリックのセント・ルカ教会で、左右の空に舞う天使の姿にはウイリアム・ブレイクの影響を思わせるという。

ところでB・リーチは一九一一年、東京ではじめて楽焼を焼き、それに強い興味を抱いた。翌年、富本憲吉とともに六世尾形乾山に入門、二人は後に皆伝目録を受け七世乾山を名乗ることを許される。

年譜によればB・リーチは一九一四（大正三）年四月以降、三回ほど作品を展観している。しかしその年の制作として確認されるのは桜木町窯での作

という『楽焼葡萄文壷』だけである。この楽焼の蓋付壷は富本憲吉の記録によれば三点あり、全く同じ模様ながら、寸法がわずかに異なる。三つともリーチ自筆の箱書で、いずれも〝１９１４・ＢＬ〟と墨書されている。

一つは柳宗悦が購入、現在日本民藝館の蔵品（径二四、高二六、いずれもセンチ）となっている。もう一つは富本憲吉が求め、のちに国立京都近代美術館の所蔵（径二五、高二六・五）となった。三つ目はリーチ自身が所持していたことが判っているが、その後の行方は不明であった。



バーナード・リーチ著
『回顧 1909-1914』表紙絵

さて、リーチ所持の楽焼の蓋壷はその後どのような運命をたどったのであろう。一九二〇年五月末にリーチは濱田庄司とともにイギリスに帰る。この時、リーチは日本で制作した作品を中心に、ほとんどの自作品を神田の流逸荘画廊に預けて帰ったのであった。

この三年ほどあとの一九二三年四月下旬、柳宗悦は、流逸荘で「リーチ展」を開催する。このさいの出品作品は、セント・アイヴスからの新作に加え、リーチが流逸荘に遺した作品も展示販売された。展覧会終了直後の五月五日付の柳からリーチ宛ての書簡によれば、「会は初日から盛況で、…楽焼はすべて売り切れです」、と書いている。

実はこの三点目の『楽焼葡萄文壷』（径二一、高二三）が昨年秋、縁あって、前記の『ゴシックの精神』とともにたくみの所蔵となった。この蓋付壷はリーチにとって愛着の深い品であったとみえて、一九一四年十月、五年間の日本での思い出から、哲学的思索、詩、エッチングをまとめ出版した冊子『回顧 一九〇九年－一九一四年　Ｂ・リーチ』の表紙に水彩画で描かれている。またこの本のエッチングの最初のページも『ゴシックの精神』であった。

前記の二点をはじめリーチ作品の熱心なコレクターであったＮ氏はもう亡くなられたが、リーチさんともファンとして親交をもたれた方であった。

なおＮ氏旧蔵の「ゴシックの精神」は、雑誌「民藝」のリーチ特集号（昭和三十六年十一月号）に、本文内写真及び「リーチ作陶五十年記念展出品目録」にＮ氏出品として掲載されている。

このたびの巨匠展には、このほかＮ氏蒐集のリーチ作品十点あまりが出品の予定であり、御期待いただきたい。

（志賀直邦）

たくみ特別企画

民藝運動の巨匠展

― B・リーチと芹沢銈介を中心に ―

会　期　平成二十三年六月十八日（土）～七月四日（月）
六月十九日（日）、二十六日（日）は営業。七月三日（日）は休業。

会　場　銀座たくみ二階ギャラリー
営業時間　十一時から十九時まで（日曜、最終日は十七時半まで）

彫象嵌葡萄文茶碗（B・リーチ）

水彩画「イタリアの椅子」（芹沢銈介）

今回、出品されるリーチさんの作品の内、エッチング「ゴシックの精神」と「楽焼葡萄文壷」はいずれも百年ほども前、もっとも初期の作品です。そのほか珍品から親しみ深い品までお楽しみいただけます。また民藝運動に心を寄せた作家たちの仕事の幅の広さを窺うことができます。そして芹沢先生の「法然上人絵伝」や「親鸞聖人御影」も、法然上人入寂から八百年の今年、あらためて拝することの意味を思います。どうぞご清覧のほどお待ち申し上げます。

↑ 出品作家 ↓

バーナード・リーチ、芹沢銈介、濱田庄司、富本憲吉、棟方志功、金城次郎、舩木道忠、そのほか現代工藝作家の方々

↑ 出品品目 ↓

陶磁器、陶タイル、掛け軸（書、素描、型染絵）、額装（エッチング、型染絵、水彩）、屏風、初期大津絵、ガラス絵、着物、着尺（芹沢銈介、宮平初子、吉岡常雄）、そのほか

楽焼「葡萄文壷」高23㎝（B・リーチ）

青白磁刻線盒子（B・リーチ）

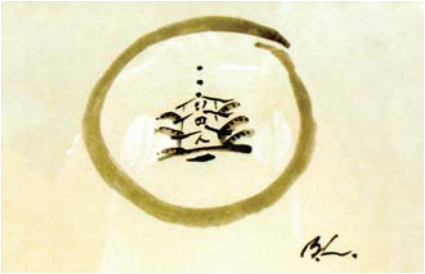
エッチング「ゴシックの精神」（B・リーチ）

染付「刻線四つ葉文盒子」（B・リーチ）

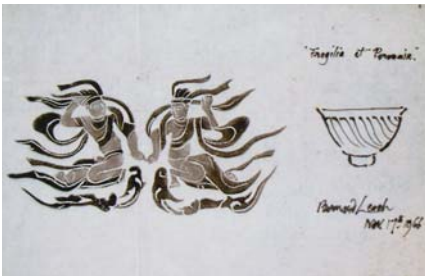
灰釉 クリーマー（B・リーチ）

染付「魚とかもめ文皿」（B・リーチ）

ガレナ釉 マグ（B・リーチ）



肉筆画「三重塔」（Ｂ・リーチ）



中国拓本に茶碗スケッチ（Ｂ・リーチ）

ガラス絵「パリの朝」（柚木沙弥郎）

水彩画「三春人形」（芹沢銈介）

三彩釉大鉢 径40㎝（舩木研兒）

手縞紬 着尺（宮平初子）

軸装「洗濯する韓国婦人」（Ｂ・リーチ）

登窯文藍地 着尺（芹沢銈介）

染付飾皿（富本憲吉）

型染「はたおり模様」（芹沢銈介）

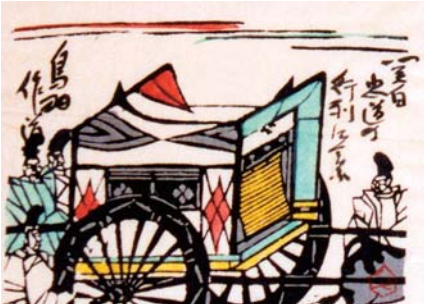
草木染 着尺（吉岡常雄）

初期大津絵「菩薩」

茶壷 高42cm（金城次郎）

糠白釉 ピッチャー
（濱田庄司）

型染絵「法然上人御影」（芹沢銈介）



極楽から来た「関白忠道の行列に合う」
（芹沢銈介）

法然上人絵伝「頭光踏蓮」（芹沢銈介）

極楽から来た「壇ノ浦」（芹沢銈介）

法然上人絵伝「二河白道」（芹沢銈介）

型染絵「親鸞聖人御影」（芹沢銈介）

芹沢版・物語絵本

とくに法然上人絵伝について

志賀　直邦

今年は浄土宗の開祖法然上人の入滅（建暦二年・一二一二）から八百年、これを記念する「大遠忌」の法要が総本山の知恩院をはじめ各地のゆかりの寺院で行なわれている。

法然の生きた時代は平安時代末期から鎌倉時代の初めごろ、貴族の世から武士の時代へ移り変わるまさに転換期であった。この時代、地震、洪水、京都の大火、飢餓などの記録多く、地方の武士や僧兵、貧民の動揺は、体制の根幹を揺るがし始めていた。

そのようなときに、寺院での祈祷に依らず、自ら〝南無阿弥陀仏〟の六字の名号をひたすら称えるという専従念仏によって、善人、悪人を問わずすべての凡夫にも阿弥陀の慈悲が与えられるという教えを、法然が説いたことは画期的なことであった。

法然の一代記や、悟りをえて一宗を開くに至る波乱の道のりについては後に記すが、ここではまず「絵伝」というものの性質と、新しい「法然上人絵伝」が芹沢銈介の手で誕生した事情について述べたいと思う。

○

平安時代は、源氏物語、枕草子や土佐日記などの王朝における文芸が盛んであった。これらの作品は文章だけではなく次第に詞書きの文にそえて、大和絵風の彩色絵巻が描かれるようになった。また仏教の高僧、聖人の伝記、逸話などを描いたものとしては鎌倉時代に入って「一遍上人絵伝」「西行物語絵」「法然上人絵伝」「親鸞聖人絵伝」などがある。

「法然上人絵伝」は、増上寺本や知恩院の四十八巻本など鎌倉時代にさかのぼる貴重な絵巻物が多い。ただ絵巻という画面形式からして机上で鑑賞するものだから、一般の門徒の目に触れることはまずあり得ないことであった。

そこで法然による念仏の教えを広く大衆に伝えるために、鎌倉時代末あたりから大きな画面による掛幅絵伝が作られるようになった。これは床の間に掛ける普通の寸法よりはるかに大きくあたかも絵巻物を切り取って上下より沢山貼り付けたかのように見える。

この掛幅絵伝は一組が何幅もあり、一幅に描かれる絵の段数も六から八段、画面の数も数十枚にもなる。またこの掛幅絵伝を見る順序は第一幅の右下辺から左へ、二段目は左から右へと進み、第二幅は上から下に下りる。同じ要領で最後の幅まで進むのである。

文盲の多い時代だったから詞書はなく僧侶らによる解説で、絵伝を見ながら開祖の一代記を学ぶのである。これは真宗でも行われ、昨年富山県南砺市で行われた日本民藝協会全国大会のおり、光徳時で拝見することができた。

○

法然上人をこよなく崇敬し、また昭和二年（一九二七）、柳宗悦の「工藝の道」を読んで柳を訪ね、仏法の真理

と美の真理が同一であることに目覚めた、兵庫県明石、無量光寺の住職小川龍彦にとって、芹沢銈介との出会いはまさに天恵ともいえるものであった。

昭和七年四月、京都の帝室博物館で「法然上人絵伝展覧会」が開催された。この会は知恩院の寺宝をはじめ貴重なものを網羅した空前の展観であった。

このおり、この会を拝観した小川師は数ある名品の中でも、とりわけ木版画である「正和版・法然上人御影」（正和四年・一三一五）に惹きつけられた。（「工藝」九五号）それと共に小川は、上人御影や絵伝の現代版、昭和の新作を熱望する思いにかられたという。

彼は正和年代の木版画御影を拝するうちに、これが上人の真影を数多く廉価に頒布する手法であることに気付き、現代の丹縁絵本の第一人者である芹沢銈介に白羽の矢を立てたのであろう。

昭和十二年八月、小川師は神戸・藤ノ寺に畏友望月信亨を訪ね、法然上人絵伝の新作発願への思いを次のように打ち明けるのであった。

「絵伝の完成には何よりも第一に良き画工を求めねばなりません。私は芹沢氏によれば大丈夫つくれると思ったのです。芹沢さんは謙虚な人柄で、なおかつ昔から浄土宗だそうです。柳先生や河井、濱田両翁からも相談役をお引き受け戴いているので、絵の方はもう安心です。」と延べ、全体の構成や各図の主題、詞書の選択への助言を求めたのであった。

○

さて、ここで小川龍彦の構成、芹沢銈介作画による「絵伝」ものがたりの概略について記そう。

まず望月信亨によれば、絵伝の第一話の「仏教伝来」と第二話の「聖徳太子・崇仏」の二編はまさに小川と芹沢の創意によるもので宗祖絵伝の導入部として理想というべきという。

鎌倉時代からの諸本はその多くが巻一の一段、二段が「上人誕生」「竹馬遊戯」で始まる。それに対して芹沢版では仏教の百済からの伝来と、聖徳太子の篤い仏への信仰をはじめにおいたことを望月は高く評価したのである。

小川が「昭和版絵伝」を発願したのは日本が武力をもって中国へ侵攻したまさにその年。法然や親鸞が生きたのもそのような戦乱の時代であった。小川師が今の、現代の上人像を熱望したことの意味がそこにあったのである。

○

法然（幼名勢至丸）は一一三三年、美作の国（岡山）稲岡庄の名家、漆間時国の子として生まれた。所領の争いで父が明石定明の夜襲にあい命を落したあと勢至丸は寺に預けられ、やがて比叡山延暦寺で修業することになる。

そのころ、天台、華厳、真言の各宗派は協議論争や勢力争いに日を送り、延暦寺も山法師と呼ばれていた。勢至丸は三年の修業ののち黒谷の叡空の門に入り法然房源空という名を許される。その後参籠、修業を重ねるもなお人々を救う道の遠きを悩み、興福寺からさらに各地を遊行し続けるのであった。

世情はといえば、鳥羽上皇と崇徳上皇の不和をきっかけとして保元の乱がおこり源平争乱の幕開けとなる。時あ

たかも打ちつづく争乱と飢餓によって庶民は貧苦の底にあった。日々の暮らしに安寧はなく、百姓、地侍は時に悪党とよばれ、山人や漁師は生物殺生の罪に怯え、遊女、非人もまた極楽往生の望みとてなかった。

さて、法然は十年もの彷徨、修業のの ち黒谷に戻り常座三昧の修業に入る。ある夜法然は、夢の中に唐の高僧、善導が現れて、ひたすら念仏を唱える専従念仏の道こそが本願への正しい道であることを示される。

法然に帰依していた後白河上皇は、彼が道を見出したと聞いて悦び、高倉天皇を受戒させ、そして東山の吉水に法然を住まわせる。吉水には熊谷連生（治郎直実）や親鸞などが集まり、ともに専従念仏の道に入ったのであった。

しかし平家滅亡によって力を盛り返した南都北嶺の大寺院は、法然らの専従念仏が旧来の仏法に反するとしてその停止を朝廷に要請したのである。そして法然は塩飽島へ配流と決まり、親鸞もまた越後に流されたのであった。

法然配流の道中の室津では、遊女たちまでが舟をこぎ寄せて法然を迎え、拝むのであった。このように漁師や百姓など名もなき帰依者が各地に法然を迎え、専従念仏の教えは次第に広まっていった。法然上人の教えと事蹟を絵と詞書で記した物語絵伝の絵巻物や、より民衆的な掛幅絵伝も、このあと宗門の各寺院で模写や新作など多く制作され、伝えられていった。

小川龍彦発願、芹沢銈介制作による昭和版「法然上人絵伝」は、その全巻六十四図が昭和十三年十一月から十五年にかけて完成し、翌年三月、表紙芭蕉布の和綴本、葛布帙入りの限定百部が日本民藝協会から刊行された。ただその内多数が神戸無量光寺に保管されたまま空襲で焼失したといわれる。

戦後になって「絵伝」への愛惜の念止みがたい小川師によって、昭和五十二年（一九七七）、白描印刷、手彩色の雁皮紙本百部が、小川を中心とする芹沢本法然上人絵伝完成刊行会から刊行された。また絵伝のほか、芹沢の自刻による「法然上人御影」や「親鸞上人御影」もその後制作され、宗門だけでなく広く親しまれている。

展覧会予告

出雲・出西窯展

会期　七月八日（金）～十六日（土）
　　七月十日（日）は営業。
会場　銀座たくみ二階ギャラリー

出雲神話の里、斐伊川のほとりの出西窯は、今年で創業六十四年を迎えます。河井寛次郎、吉田璋也、バーナード・リーチらのよき薫陶を受けて、出雲の地に根を下ろし、使いやすく親しみ深い器つくりを心がけてきました。三年ぶりの会になりますが、今回は窯の二代目を中心とする若手たちの新作品に加えて、先代の旧作品も所蔵家の好意を得て展示即売いたします。手仕事の、伝統の継承と、新しい試み、発展、変化などお楽しみ下さい。

たくみ歳時記
夏の風物詩・うちわ色々

初夏の風物詩といえば、昔は浴衣にうちわ、風鈴、金魚鉢にかき氷が定番でした。なかでもうちわの風はなんとも肌に心地よいものです。

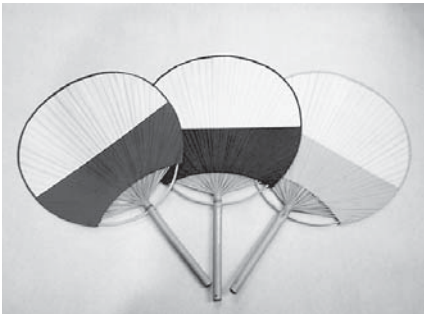
たくみでは今年も大小のうちわを取り揃えています。

丸柄のブリキ玩具絵の品は、麻地に型染で、芹沢銈介の門下大橋秀雄の作。花鳥、草花文はやはり芹沢門下の土手武彦の型染紙で、加工は香川の丸亀です。日の出模様の小ぶりの品は越中和紙を用い、手軽で喜ばれます。

型染麻地うちわ
3,150円

型染紙うちわ
2,520円

型染紙うちわ
2,520円



日の出模様和紙うちわ
1本　1,050円

あとがき

「たくみ」誌は戦前、「月刊民藝」が発刊される前の一時期、そして戦後は「民藝」誌が再刊されるまで、合わせて五十号余り刊行されました。小冊子ながら「民藝」誌を補完する立場の情報誌として好評を得ました。そして平成十四年十一月復刊の、現行の「たくみ」誌も今号で五十号を迎え、思えばまことに感慨無量であります。

ここまで来るのに、執筆者の方々、編集、印刷、発行に関わって下さった多くの方たちにお世話になり励まされました。これからもたくみのお客様、民藝の愛好者の皆様のお力をかりて楽しい、ためになる冊子にしていきたいと思います。ご寄稿のほど、お待ちいたしております。

（志賀直邦）

発行　株式会社たくみ
東京都中央区銀座八－四－二
発行責任者　志賀直邦
電話　〇三－三五七一－二〇一七
FAX　〇三－三五七一－二一六九
振替　〇〇一一〇－二－三五六五九
定価　六〇円（税込）